



TITLE:

渡歐日記(第三信)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

---

CITATION:

寺田, 貞次. 渡歐日記(第三信). 地球 1924, 2(4): 522-525

ISSUE DATE:

1924-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182755>

RIGHT:

## 渡歐日記

## (第三信)

## 寺田貞次

三日、曇雨は止んだが尙濃霧で憚陶しい、午前十時出帆、船は下流に向て下る、昨日見落した處を補はん、兩岸を注視する、江の作用で出来た低平な沖積地に淺緑の楊柳が茂て居り所々英國風の建物が濕潤な霧にかすんで見える、吳淞と上海港との關係等考へて居る間に江口に出た、船は江口を直に東に向て進む兩岸は次第にうすく殆ど見えなくなる處迄眞直に進む、濁流は何時迄も濁流である、午後二時と覺しくて一艘の小汽船の處で停船した、觀れば Pilot Boat の *Ling Kong* 號である、門司出帆の時と同様、揚子江口の如き水深の變動甚しいので此處から案内を受けるのである、霧は餘り深くはないが、夕に近づくに従て波漸く高く船體の動搖を感じ何さなく気分がよくなくなつた、横濱正金銀行副支配人伊藤愛吉氏と初めて知合になつた。聞て見ると氏は鹿兒島出身で小生とは同窓になる、氏が今度英京語になつたので歸鹿の際舊師山田準氏から小生留學を聞たこの事であつた、波高き爲めか織田博士盛にデツキを散歩される一寸眼を引いた。

四日、曇昨夜と異り今朝は波靜かである、然し濃霧は尙去らない、晝には北緯廿七度十八分東經百貳十壹度廿八分の處を

走て居る、香港迄は四百八十五哩の由揭示で知た、何處迄霧の立ちこめて居ることか、自然的作用の偉大さを感じる折から午後になり、さしもの濃霧も次第に薄らぎ時々青空を眺め遂には一點の曇りなき快晴となつた、門司出帆以來暫く拜しなかつた日光を拜し、揚子の濁水も何時しか去り、清き空に清き波、誠に愉快の感に打たれた、然し濃霧の間至極靜穩であつた海は霧の晴れると共に西南より吹き來る風次第に強く、白波をすら見るに至つた、向ひ風の事とて船も一時間約二哩は損をする事聞いた、然しバロメーターは常に廿九インチ七十附近を上下して別に低氣壓ではないから心配はない、之が所謂 *haze* である、先月頃迄は風は北から吹き此邊は相當の強さを保つのであるがモンスーンの方は印度洋の方は勢が強いが此邊になると餘程勢を減するこの事である、但し我が船も印度洋通過の際には或は苦痛を受けるかも知れないと船員は申して居た、夕頃には愈々臺灣海峡にかゝる、入口に在る燈臺が視線に入る事聞たが見えなかつた。

五日、晴、モンスーンも少しやわらいで波靜である音に聞居た臺灣海峡も難なく通過したらしい、漸次暑さを感じる様にな

つて来る正午には八十度をした、氣の早い連中はそろ／＼夏服を引張り出す様になつた、晝には北緯廿三度廿四分東經百十七度四十八分の處を走つて居る香港迄は貳百貳十六哩、今夜の間に港口迄漕ぎつける豫定を聞く、夕には右舷に *Boaters' Is* 等數島を眺め其中の一島には燈台の高く聳えるのを觀た、其だ美觀である、流石香港近くの海さて往來の漁船多く今日一日で五艘許出合た、明日は香港着の夜であり波も靜であるので乘客中の外人は A テッギ景勝の地に陣取て著音器に合はせダンスをやる、今迄の航海には時々外人の高くうたふ聲、貧弱なダンスを觀る位で一向旅想を慰るものもなかつたが、香港以後の航海はだいぶ長いから何か娛樂を求めないさ云ふので偶然にも諸曲同好の士が數名發見され今日ホートテッギで持ち合はせの巴を合吟した、集る者には京都府立醫科大學教授醫學博士本永七三郎、名古屋醫科大學教授醫學博士小口忠太、朝鮮總督府事務官關水武、同内務部長松本誠の諸氏で小生も加つた、何れも觀世流で、船長も觀世の達人との事で厚意に依りホートテッギに諸曲場を設けてうなる事になつた。

六日、晴 豫定通り昨夜の中に港口に着し、起床した時には既に入港して居た、初て、テッギに出て灣内を眺めた眼には如何にも良灣に見えた、寫眞で觀て居た通りの香港を眼のあたりに觀たのであるから實に愉快であつた、然しごちからから入港したのすら知らない自分には香港の研究は之れからである、ランチは着く苦力はドシン／＼上つて来る、早や上陸の準備もしなければならぬ甲板には却々混雜である、支那人の兩替屋が甲板に

來て銀貨を手にはガラ／＼音をさせつゝ兩替をすゝめる、此處は香港別が用ゐられて居る、少々兩替する。小樽高商出身で目下當地三井物産に居る竹村利三郎君が迎に來てくれた、徳岡、本永、小口諸氏一行と別れ、竹村君の案内で市内を見物する。

案内記で讀だ如く此地の見物中著しいのは島廻りさピーク登りである、自動車を雇ひ、島廻りを始める、右から左へ廻る先づ大通を *City Hall* に出、*Peak tram station* の傍を登り、*カバーナリー* 邸宅、香港大學門前を通り、道は島の稍高い處を走て居るので市の一部が眼下に見え對岸の景色美しく廣州から來る珠江の流入口があれださ敬へられ廣東方面の事だと思ひ出し廣東方面の物資はあの江に依て此處に集散するか等と考へつゝ、走る、*Coca Island* が前に見えるセメント會社が煙を吐て居る船は入港には東水門を通り、出帆には西水門を取る、此島の邊を通るのだ等と敬へられる、路はごち迄もアスファルトのよい道であるので自動車は滑るが如く走り爽快である、漸く島の後側に來ると道は稍海岸近くの低い處を走る、所々の入江を廻て走る *Abdeen* と云ふ漁村に出る、支那人の部落で灣内には支那風の漁船が無數碇泊して居る舊香港とも云ふべき處で三井物産等は餘程古くから店を開たもので記録は明治廿七八年頃以前は殘て居ないので不明ではあるが明治十二三年頃には既に此島に來て居たと考へられて居り、其場所は或は此邊であつたかも知れないと竹村君の話である、開拓の始めは第一が醜業婦第二が三井物産と申すが之も其謬を証明する話と思つて聞た、次に *Deep water bay* がある、ゴルフグラウンドがある、青松ではな

いが白砂の灣、水も清い、海水浴場になつて居り灣頭にホテルが設けられて居る、Repulse Bay Hotel と稱する、島廻りの客は大抵此處に自動車をとめる、余も此處に一体した、船の連中で既に來り休で居るのもあつた、ホテルは立派な建築で中央はダンス場をなし食堂喫茶部等備て居る、風景に當む廊下で喫茶の上再走る、Tymanwater Reservoir (貯水池) を通過する規模廣大中央が橋梁をなし風景絶佳、先年我が皇太子殿下も此邊を御散策遊ばされた由、道は再北側にもある、Shaukiwan (筲箕灣) に出る、支那人部落で三板群集して居る、夫からTaikoo Dockyard (英人經營南支第一の大ドック) 灣仔と稱する支那町を通る、此處には同胞の店も二三見受けた、Happy valley と稱する運動場の傍を走て再 City Hall に歸た之で香港島の一周を終たのであるが、此間約二時間自動車賃 small car で約八弗 big car で十二弗位である、島廻りは夫程必要とも考へなかつたが廻て見るに其の道路のよい事、自動車散歩の興味等は別としても全島の様子を概括的に知る點だけでも確に有利であると思つた之に依て觀ると香港島は全島花崗岩質の岩山で殆ど平地を有して居ない、従て農耕の餘裕をもたない、僅かの谷間と雖耕作は行はれて居ない、樹木の如き、英國經營後植樹したもの、如く今では熱帶的綠樹茂り新緑の景色美しく日本風の松をも見受ける様子になつて居る。

City Hall といふ City Hall museum、並に Hongkong & Shanghai Banking Corporation が在る、博物館は圖書館と共に一建物中に在り、地方の動植礦物より土人風俗品歴史的遺物を蒐集して在

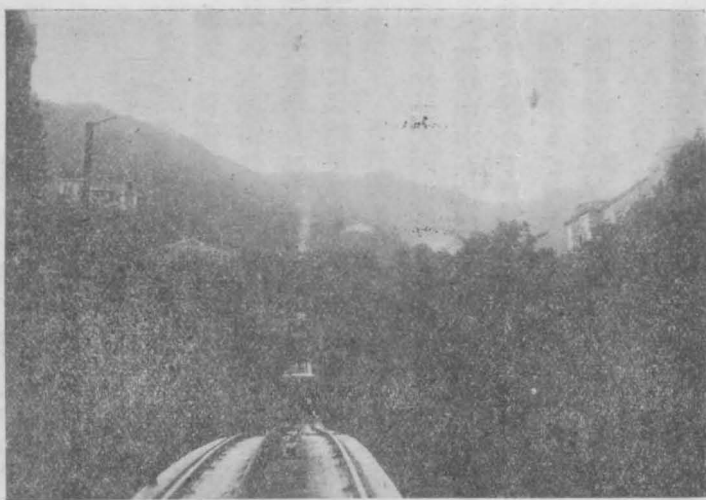
るが貧弱である、圖書館には隨分古書も蒐蔵されて居る様に思はれたが寸暇なきを遺憾に思つた、香港上海銀行は當市最有力



マングスチン

の金融機關であるから一覽した、彼是する中晝になり暑も身にこたえて來たから日本人經營の清風樓と云ふに休だ、清風樓なご申すさ如何にも日本風の涼しうな建物の様に思はれるが相變らず洋館に疊を敷いたに過ぎない、灣内を眺め得る點が清風でもあらう、日本食を味た、食後にマングスチン

稱する果實を出した竹村君曰く之れは熱帶果實中最美味の品で貴重なるものであると、形態色澤共に茄子に近似し、先年南洋



香港ピーク鋼索鐵道

旅行の際南洋茄子と聞た果實である、果皮を割ると白色柔軟の實がある、稍酸味を帯び小生の如き果實癖ひの者でも適して美

味である、時もだいぶ過たから再大通なる ハイウェイ Highway road を通り City Hall に出で Protestant Cathedral の古風な建物前を通り Peak Tram station からケーブルカーに乗る、香港市街の後に聳ゆる海拔壹千三百尺の山頂近く迄急な崖を一直線に登るもので、客車は丁度電車のような形で軌道を傳ひ鋼條で昇降する装置、恰も我がインクラインの如きもので途中昇降兩車が出合ふ様になつて居る、山上をビクトリヤガッブと稱し約十分で着きます、急な事は飛行機もかゝやと思はれる程で段々小さくなつて行く市街を見下しつゝ登る前快である、山頂にはホテルあり邸宅あり、兵營も在る、ホテルはピークホテルと稱し、山頂に登るもの、廻る道等例のアスファルトの道が四方に通じて居る山頂の信號所迄は徒歩でも行けるが、支那人の轎の便もある、山頂は時々襲來する濃霧の爲め眺望をさまたげられる事もあるが山麓に比し氣温的十度の差を有し、私の登た時は市内で八十度以上であつたのが山上では七十二度を示し清涼であり、其暗れた時香港灣を眼下に見下ろしさしもの大家高樓も對岸に見ゆる九龍半島から遙か廣東邊に横がる連山迄も一望の中に入りさながら一幅の畫圖の如く暫く立去りやらず觀察した。